

律令官階制の研究（一）

目次

はじめに

一 朝鮮半島に於ける官階制

(1) 古朝鮮から高麗時代迄の史的概観

(2) 高句麗の官階制

(3) 百済の官階制

(4) 新羅の官階制（以上本号）

二 日本に於ける官階制（次号）

別表1 日本・朝鮮・中国の官階制対照表（本号）

別表2 日本・中国対照朝鮮略年表（本号）

元来、我国の伝統的文物の多くは、近隣諸国の影響を受け、輸入したものであり、その上で、本来の民族性や慣習性に一致すべく改変させたものであるといえる。

律令制(律令制への移行期を念む)時代、朝廷を主体とする国家形態が、事実上、完成していない、この時期に、あらゆる意味に於いて、栄典制度の整備は、近隣諸国と対抗すべく、我国にとって国を挙げての一大事業であつたと考へる^(一)。

私は、これまで、栄典制度を通して、様々な政治制度の考察を試みたが、その国家形態が専制・王制・共和制・社会主義・資本主義・自由主義等の如何を問わず、また、栄典制度の創設が絶対的専制政治の結果によるものであらうと、なかろうと、今日、現実に国家の一制度として、殆ど全ての国に於いて、栄典制度が存在しているという事は、明確に、その国家で栄典制度が存在意義を有し続けているという事に他ならない。

この事は、我国に於いても例外ではなく、栄典制度は、国家の一制度として、律令制時代、即ち、西暦六〇〇年前後に創設され、その後、その名目上の形式は、色々に改められたものの、その中核体は、脈々と伝えられ、現在に至っている。

我国の栄典制度の起点は、推古天皇の八年(六〇〇年)、聖德太子によって制定された冠位(Court rank of coronet)、後の「官階制」であり、この源流こそ、高句麗一二等、百濟一六等、新羅一七等の官階制である^(二)。

ここでは、朝鮮半島の三国時代を背景に、どの様に我国の栄典制度の起点たる冠位(官階制)へ影響を与えたかを明確にし、以て、我国の官階制と比較しつつ、若干の考察を試みる。

尚、予め断つておくが、この史的背景の概観は、あくまでも我国の律令制国家に於ける冠位(官階)制、即ち、現

行栄典制度の起源的源流たる朝鮮半島の三国（高句麗、百濟、新羅）時代を中心とした史的背景の概観であつて、現在の朝鮮半島に至る迄の史的概観ではない。

従つて、次に、古朝鮮の太古から三国時代を経て、高麗時代に到達する迄を概観する。

一 朝鮮半島に於ける官階制

(1) 古朝鮮から高麗時代までの史的概観

今日、朝鮮半島は、一九四五年八月一日の日本終戦を機に、連合国軍たるアメリカ及び旧ソビエト両軍の分割占領以来、朝鮮戦争を経て、一九五三年七月二十七日、休戦協定により、北緯三八度線を以て、分断されている⁽³⁾。

この朝鮮という国と我国の關係は、その歴史的背景を顧みると、計り知れないものがある。

實際、朝鮮と我国は、古来より、様々な意味に於いて、相互に影響を与えつつ、深く関わつてきた⁽⁴⁾。

朝鮮は、アジア大陸の東端に位置し、日本列島に向つて突き出た半島で、面積約三二万平方キロメートル、英国本島、ルーマニア、ユーゴスラビア等には、ほぼ匹敵する国土を有し、南海上の濟州島、東海上の鬱陵島を始めとする大小三〇〇〇もの島及び西南部に複雑な海岸線を有する半島でもあり、氣候に於いてのそれは、我国の北海道、若しくは、東北地方に似ている。

現在、大韓民国、いわゆる南朝鮮に、約三五〇〇万、朝鮮人民共和国、いわゆる北朝鮮に、約一五〇〇万が、更に、在外朝鮮人を加えると、その数は、優に五〇〇〇万を越え、イタリアやフランスに追いつく様で、単に、人口の

数の上から考えても朝鮮は、決して小国ではないし、しかも、歴史的に観て、ほぼ、完全なる単一民族国家である。⁽⁵⁾

この様な国土の状態の上で、営まれている朝鮮の社会的生産活動は、その歴史的に形成される文化の特質を条件付ける一要因を為す事であろう。

朝鮮半島は、とりわけ、中国歴代王朝の圧力に晒されながら、一貫して、民族の独立と文化の独自性、更には、伝統的文化を子孫へ確実に、徹底して継承させる事を保ってきた強韌さは、どんな意味に於いても、注目するに値し、評価できる事ではないだろうか。

朝鮮民族の祖先の太古に於ける生活圏は、単に、半島のみでなく、中国東北、いわゆる満州からロシア沿岸州にかけての広大な森林地帯に迄及んだといわれ、夫余(北満州)、沃沮、濊、貊(共に東北沿岸地域)、韓(半島部)、その他の名で呼称される種族集団に分かれて、生活を営んでいたと考えられる。⁽⁶⁾

すでに、この時、種族集団全体に、文化的共通性は、勿論の事、政治一団性が備えられていたのではないだろうか。朝鮮民族と満州民族が、分岐していく決定的契機は、農業生産の開始と関連して、生産の展開と共に、より農業に適した自然条件を求めて、生活文化圏内の北方から半島部への波状的移動によって、農業生活の定着化に伴い、朝鮮民族を形成し、他方、伝統的生活文化に留まった部分が満州民族を形成していったのであるが、政治的には、はっきり分離していた訳ではなかった。

この生活文化圏への移動による民族形成は、朝鮮民族優位という力関係に発展し、農業生産力の絶大性を狩猟採取生産力に、見せつけるという結果を生じさせる。

農耕文化へ移行した朝鮮民族の政治的統合は、七世紀に於ける統一新羅の時代に、一応完了する。

しかし、この時期、北方には、まだ、高句麗の系譜を継ぐ渤海が明らかに存在しており、一〇世紀初期（九二六年）の国家滅亡と共に、それらの遺民は、高麗へ合流していくのだから、朝鮮民族の統合と満州民族との分岐が定まったのは、寧ろ、高麗の時代と考えるべきであろう。⁽⁷⁾

当時、朝鮮民族は、諸種族ごとに、幾十もの小国が独自の権力を維持しており、民族共同体が、完全に解体するという様な事は、不可能に近く、原三国時代（三国時代の前段階、紀元前五七十年頃から紀元二五〇年頃）で、逸早く新しい生産力と武力を手にした部族のみが、種族内の小国を征服する事が可能であり、この繰り返しにより、漸次中央集権的国家を形成し、やがて、高句麗、百濟、新羅が鼎立する三国時代へ突入していくのである。

そもそも、これら朝鮮の総体としての建国は、何時頃なのであるうか。

これは、どうやら、いわゆる「檀君伝説」に、その答えが、見出せそうである。

この伝説は、「天王桓因が、王子桓雄を地に降りし、桓雄は、太伯山頂の木の下に降り立ったところ、樹下の洞窟に住む、一頭の熊と一頭の虎が桓雄を慕って、人間となって忠義を尽したいと願ったので、彼は、もぐさ一束とにんにく二〇本を与え、一〇〇日間の修行を勧めた。ところが、気の短い虎は、修行に耐える事なく逃げ出し、熊のみが、首尾よく、修行を全うする事ができ、美女と化した為、桓雄は、その熊女を娶って、王子檀君王儉を生ませ、その王儉は、平壤城に都を定めたが、後に阿斯達に遷都して、一九〇八歳の長寿を全うした」という内容で、我國の「国生みの神話」や「天孫降臨の神話」に類似している様な感を受ける。

建国は、西暦に比定すると、なんと、幼元前三三三三年とされているが、この時代に「暦」が存在したのであるうか。

いや、この時代に暦が存したと根拠付ける文献はない。

従って、神話的な暦日であると考えざるを得ないだろう。

そして、確かに、紀元前三三三年という暦年には、科学的根拠を見出す事ができない。

しかし、この伝説は、今も人々に浸透しており、更に、大韓民国に於いて、一九六〇年迄、この檀君紀元を用いていたという既成の事実も在する事から考えて、一概には、否定できないのである。

また、これを単なる伝説と安易に捉えるべきではないと考える。

なぜなら、それは、何んらかの意味に於いて、實在の国家形成の動きを反映していると考えられるからで、高句麗、百済及び新羅の建国伝説とも類似している。⁽⁸⁾

その後、一世紀から二世紀(伝説上は、紀元前一二二年)頃、檀君は、中国殷の賢人箕子が、その王位を継承したといわれている。

しかし、實際は、箕子が王位継承するのは、唐突すぎ、その登場を為す必要性は、どの古文書を考察しても、全くないといってよいし、韓国史界の大元老、李内燾博士も、『韓国古代史』の中で、桓雄箕子王位継承説に就いて、「作爲的である」と論じ、否定している。

では、誰が王位を継承したのであろうか。

それは、燕人の衛満であり、紀元前一九五、衛氏王朝が成立する。⁽⁹⁾

衛氏王朝は、その後、三代八〇年ほどで前漢により、滅ぼされる。

衛氏王朝滅亡を前後して、衛氏を挟む様に南北で新しい国家を形成する動きが活発化し、最初に産声を挙げたのが、

“高句麗”である。

高句麗は、元夫余種族に属する一介の小部族にすぎなかったが、紀元前一世紀の中頃（紀元前三七年頃）から発展し始め、強力な中央集権国家体制と軍事力を整える事により、近隣部族を次々と征し、夫余一円及び濊、沃沮をも支配下に置き、三、四世紀頃には、朝鮮半島北部から満州一円を領する大国家に成長し、それは、中国北方を圧迫する如くであった。⁽¹⁰⁾

しかし、この様に強大化した高句麗も、原朝鮮文化圏全体の政治的統合を一挙に実現するに至らず、高句麗に触発されて、高い農業生産力を背景に、別個の同型国家形成を志向したのが、南部三韓の馬韓に於ける一部族伯濟、後の“百濟”であり、四世紀（三三〇年頃）には、西南朝鮮の馬韓一帯を領有する。

また、これと同じくして、四世紀、辰韓の一部族であった斯盧が領有国家、新羅へ成長する。⁽¹¹⁾

かくして、四世紀以降、全朝鮮領域の統合を目指して、高句麗、百濟、新羅の三国が、角逐を繰り返し、鼎立する時代に入っていくのであるが、当初、軍事的文化的生産的に優勢だった高句麗は、他の二国の目紛しい連携関係により、同等勢力に成りつつあった。⁽¹²⁾

高句麗は、様々な状況に直面し、それが、国内安寧を考へての行動であっても、霸道的考へるの行動であったとしても、結果的には、その行動力学が国力を越えて、国家が疲弊せざるを得ない状態となり、衰退していくのである。

この事情は、他の百濟や新羅にとっては、利を生じさせ、逸早く新羅は、唐の軍事力を利用する事で、連合軍を以て、六六〇年、まず百濟を滅ぼし、続いて、六六八年、高句麗を滅亡させ、更には、唐勢力の駆逐により、朝鮮半島部の政治的統合を成し遂げたのである。

いわゆる「統一新羅」と称される王朝であり、六六一年、新羅王家の金春秋(太宗武烈王)と伽耶王家の金庾信の血縁関係によって樹立された。

新羅の体制は、中国の骨品制を基本とする官階(基礎は、高句麗一二等官階制)を中核とする厳格な身分秩序に維持された貴族政治であり、支配層の権力分散を防ぐと共に、中国の文化的所産を間接的に導入する事によって、律令・地方制度・軍制等を整えるが、その後、九世紀(八八九年)以後、農民、豪族の反乱により、衰退してゆくのである。⁽¹³⁾

新羅王朝から自立した豪族が割拠した短命の後三国時代を経て、九一八年、高麗王朝を樹立した王建(太祖八七七〜九四三)が、九三五年、新羅より王位を譲り受け、九三六年、当時の全朝鮮領域を統一する共に、これを掌握したのである。

王建は、都を開京(現開城)と定め、以後、四五〇年余、高麗時代が存続するのである。⁽¹⁴⁾

(2) 高句麗の官階制

高句麗は、元夫余族の一部族(初代東明王Ⅱ朱蒙、紀元前三七年)で、南満州松花江や渾河下流地帯等に移り住み、早くから、中国文明の接触により、発展を遂げたが、漢の設置した四郡の玄菟郡の支配を受け、魏の毌丘儉將軍の大討伐を機に、周辺諸種族を結集させ、共通の敵を討った後、併合して、高句麗が建国された。⁽¹⁵⁾

前述の史的概観でも解る様に、高句麗は、いわゆる三国(高句麗、百濟、新羅)のうちで、最も古い歴史を有する部族国家である。

高句麗の官階に就いて、『隋書』卷八一、『北史』卷九四及び『旧唐書』卷一九九上等によれば、①太大使、②大使、③小兄、④対盧、⑤意侯奢、⑥烏拙、⑦太大使者、⑧大使者、⑨小使者、⑩褥奢、⑪翳属、⑫仙人の一二官階が存する。

これに対し、唐の張楚金『翰苑』蕃夷部に「高麗記曰。其國建官九等。其一日吐捩。比一品。舊名大対盧。総知國事。三年一代。若称職者。不拘年限。交替之日。或不相祗服。皆勒兵相攻。勝者為之。其王但閉宮自守。不能制禦。次日太大使。比二品。一名莫何羅支。次鬱折。比從二品。華言主簿。次大夫使者。比正三品。亦名謁奢。次卑衣頭大兄。比從三品。一名中裏卑衣頭大兄。東夷相傳所謂卑衣先人者也。以前五官。掌機密謀政事。徵發兵丁。選授官爵。次大使者。比正四品。一名大奢。次大兄加。比正五品。一名顯支。次拔位使者。比從五品。一名儒有。次上位使者。比正六品。一名契達奢使者。一名乙奢。次小兄。比不節。比從八品。次先生。比正九品。一名先元。一名庶人。」とあり、高句麗の官階に就いて、官称及び席次が異なるところがある。

これは、どういう事であろうか。

どちらかが、正しいのであろうか。

この疑問を考察していくと、そもそも、高句麗の官階は、どの様に成立したのだろうか。

更に、なぜ、その必要性があったのか、というところに行き着くのである。

高句麗の官階の発生は、中国の官階、いわゆる骨品制 (dignity rank) に影響されたものであり、その時期は、北魏から北斉にかけての間と考える。

とすれば、高句麗と中国の關係は、平和共存という最も理想的關係の時代であつたろうし、往来が頻な際には、相

互の官階を示す事が、画期的であり、好ましい事であつて、外交対応上、官階を設けざるを得なかつたのである。

中国歴代王朝の基本的思考は、近隣諸外国の君長に就いて、彼らは、全て皇帝の臣下たる地方長官に過ぎず、例え、王に封ぜられても、諸候の礼遇しか受けられなかつた。⁽¹⁶⁾

つまり、高句麗は、好むと好まざるとに拘わらず、中国と密接な外交関係に入らざるを得ず、時には、頻繁に使節が往来する事により、その厳格なる主従関係を受け入れざるを得なかつたという事である。

この事から、高句麗は、中国から北魏の世祖太武帝(四二三―四五二)の高璉以来、名目上の高麗王に封ぜられ、同時に、実質的な遼東郡開国公に任ぜられる習わしとなつたが、それは、前述中国基本的思考によつて、高麗王を中国官階のそれと同一視したことは考えられない。⁽¹⁷⁾

即ち、その實際は、中国の三公(太尉、司徒、司空)よりも低く扱われたのである。

更に、高句麗の大臣に就いては、中国からみれば、地方長官の属僚に過ぎず、どれだけの高官や最高の大臣であっても、正四品官以上には、礼遇されなかつたという事である。

つまり、高句麗に於いて、最高の高官であつても、それは、遼東郡開国公の属僚に過ぎないのであつて、正四品官以下の大夫の位に置かれ、これ以上は、決して昇りつめる事はできなかったのである。

とすれば、正四品を最高に、順次、従四品、正五品という対比をさせていくと、最後の従九品迄、ちょうど一二等官階が当て嵌まる。

従つて、前述の『翰苑』に於ける「其國建官有九等。」というのは、骨品制にある「一品」から「九品」に至る事であつて、實際は、一二等官階になるのである。

また、高句麗の一二等官階は、中国の官階に対応すべき為のものであって、高句麗独自に発生展開したものではなく、外部から与えられた枠であると考えられ、諸外国の君長は、中国に対し藩属の礼を取りつつ、自国内では、独自の体制を設け、密かに、中国国家体制を擬していたのである⁽¹⁸⁾。

このような事情から、高句麗の官称及び席次に就いては、『隋書』等及び『翰苑』を以て相互に校訂されなければならないが、現時点の研究に於いて、その必要はないと考えるので、後者の『翰苑』を高句麗の官階と捉える事とする⁽¹⁹⁾。

即ち、①吐捩（一品）、②太太兄（二品）、③鬱析（従二品）、④大夫使者（正三品）、⑤阜衣頭大兄（従三品）、⑥大使者（正四品）、⑦大兄加（正五品）、⑧拔位使者（従五品）、⑨上位使者（正六品）、⑩小兄（正七品）、⑪諸兄（従七品）、⑫先生（正九品）の官階となる⁽²⁰⁾。

故に、最高位の吐捩（別称、大対盧）は、中国官階に比定すると正四品官であって、次の太太兄が中国官階の正四品相当官でも、高句麗の正二品なのである。

以上の様な理由から、高句麗の一品が中国のそのの正四品と同格同等であり、以下、従四品、正五品、従五品と一階ずつ対応して、最後の従九品に至るものと考え、この官階は、接境なる中国のそれと外交上及び勢力上という現実の関係から、同格であっても同等である訳はないし、官階上、高句麗は、中国に服属するものであると考える⁽²¹⁾。

(3) 百済の官階制

百済は、高句麗と共に夫余族の一部族と称しているが、その実際は、高句麗始祖朱蒙（東明王）の三男の温祚王が、律令官階制の研究（二）（河野）

紀元前一八年、慰礼城を王都と定め、即位してから、この国家が存する。

故に、百済は、高句麗の舍弟国であり、文化的軍事的政治的制度的な文物の大半を兄貴国の高句麗から受け入れ、深く影響を与えられたのであって、その一六等官階に於いて、高句麗一二等官階と何等かの間係が当然の如く生じ得る。⁽²²⁾

百済の一六等官階に就いて、『通典』卷一八五、边防百済の条に、「官有一六品。左平一品。達率三品。恩率三品。德率四品。扞率五品。奈率六品。以上冠飾銀花。将德七品紫带。施德八品阜带。国德九品赤带。季德一〇品青带。对德一一品。文督一二品。皆黄带。武督一三品。佐軍一四品。振武一五品。古虞一六品。皆白带。」と、更に、『三国史記』卷二四、百済本紀二、古爾王二七(二六〇)年正月の条に、「二月下令。六品以上服紫。以銀花飾冠。一一品以上服緋。一六品以上服青。」とあり、各官階の冠服によって、その等級を色区分している。即ち、六品迄は、大官であるから、各々独立の一等級として、服紫銀花飾冠と定め、以下、服緋紫带(将德)、服緋阜带(施德)、服緋赤带(国德)、服緋青带(季德)、服緋黄带(对德)、服青黄带(文督)、服青白带(武督、佐軍、振武、古虞)と七種に区分しそれぞれ、服の色と带の色によって識別したという事である。

つまり、文督(一二品)のそれぞれを分類上、服青に含む事によって、百済のそれは、高句麗の一二等官階に対応し得る為に見い出されたものと考えられる。⁽²³⁾

(4) 新羅の官階制

辰韓と称するそれは、一二の小国から成り、その中から徐々に霸道的力を拡大し、強力なる斯盧という小国が新

羅”となる。

斯盧国は、六ヶ村、即ち、楊山・高墟・大樹・珍支・加里・高耶から成り、各々の村長によって、自らの村を治め、重要且つ共通の問題に就いては、「和白」と称される六ヶ村の村長で構成され得る合議制により、国家運営を為したのである。

紀元前五七年、「和白」により、朴氏族中の赫居世を斯盧の長と決議して、「居西干」と称し、第二二代迄の長は、「王称」を用いず、第三二代の長、即ち、知証王（五〇〇～五一四）が初めて「王称」を用い、斯盧を「新羅」と改め、制定したのである。⁽²⁴⁾

伝説上、高句麗よりも二〇年程古いとされているが、実際、新羅と称する様になったのは、高句麗のそれより、後の事であつて、その文化や制度の多くは、高句麗、百濟、中国等の影響を受け、発展したといわざるを得ないのである。

新羅の一七等官階は、大小の称が付くのも高句麗の影響を受けた証であり、五二一年の頃、新羅官階は、①伊伐食、②伊食、③逆食、④阿食、⑤乙吉、⑥級伐食の六等官階しか存しなかったが、後次第に官称が増加し、真興王（五四〇～五七六）の立てた四碑（五六一～五六八年頃）に観る屠從人名の肩書を考察すると、ほぼ一七等官階、即ち、①伊伐食、②伊尺食、③逆食、④波珍食、⑤大阿食、⑥阿食、⑦一吉食、⑧沙食、⑨級伐食、⑩大奈麻、⑪奈麻、⑫大舍、⑬舍知、⑭吉士、⑮大鳥、⑯小鳥、⑰造位である。

前述の六等官階から、何故、二倍以上の一七等官階に移行したのであろうか。

それは、どうやら、外交政策上の問題にその答えが見い出せそうである。

新羅に於いて、一位の伊伐食から五位の大阿食迄の官階は、王族たる真骨の者に限るとされ、上位全てを王族が占めた場合、外交上影響を及ぼし兼ねない事は、容易に予測する事ができる。

外交使節の人選は、現代も古代も変わらず、難しい問題であつて、王族の真骨者が外交使節として適格であつても、適性とは限らず、寧ろ、外交使節たる適性は、その者の品格や能力であつて、官階で確定するものではないが、新羅の場合、王族官階の国定化という原則により、その外交使節のそれは、官階によつて決まる。

これは、将来的に相手国から軽視され、外交政策のみならず、貿易、経済、政治等の不振となつて、延いては、民族の生活確保が困難になる事を示唆するものであつて、王族官階の国定化は、様々な意味に於いて、自国新羅の利益を生じさせる起因となり得る。

この様な場合、上位の官階を集中させて一等級に数える事によつて、下位の者の席次が名目上にも向上し、対外的に有利な状態となる。

以上の様な事情及び立場から、王族に限られた「大阿食」以上を一位として扱われた時代があつて、或いは、伊伐食以下四等官階を大阿食と扱った時代があつた⁽²⁵⁾と考える。

これにより、前述の六等官階から一七等官階へ移行したのではなく、最初から一七等余の官階制が存したのであつて、六等官階が制度として存した訳ではないのである。⁽²⁵⁾

更に、本来、新羅の官階は、高句麗のそれを丸写しの制度化して、中国の骨品制に対応する為の一七等官階であつて、高句麗との均衡上、一三等官階でよいものをわざわざ中国正従九品、即ち、一八等官階を目標に創られた制度である。

その結果、高句麗に対して、一等階のずれを生じさせてしまったのである。

高句麗が唐兵によつて、攻められ、滅びた後、新羅は、唐に投降した高句麗の遺民を煽動して唐から叛かせて、これを収容する事により、大同江以南の土地を併合したのである。⁽²⁶⁾

この事に就いて、『三国史記』卷七、文武王一四（六七四）年の条に、「王納高句麗叛衆。又據百濟故地。使人守之。唐高宗大怒。詔削王官爵。」とあり、唐兵の進寇を観たが、翌年及び翌々年に至った戦いで唐兵が敗れ、新羅の半島統一の大勢が定まり、新羅神文王六（六八六）年に於ける高句麗人に対する叙位に關して、『三国史記』卷四〇、職官志下に、「高句麗人位。神文王六年。以高句麗人授京官。量本國官品授之。一吉食本主簿。沙食本大相。級食本位頭大兄。從大相。奈麻本小相。」とあつて、高句麗の主簿（≡從二品鬱折）を「一吉食」へ、大大使者を「沙食」へ、卑衣頭大兄を「級伐食」へ、大使者を「大奈麻」へ、各々論功行賞を爲したのである。

しかも、この頃新羅では、既に、一七等官階が施行され、確立に至つていたので、高句麗の遺民を招撫する爲に從來の制度と対照して、少しでも官階上、矛盾や不満が残らぬ様に配慮すると共に、人心を収攬したのである。

それは、あたかも我国が百濟の遺民収容の時、百濟官階を旧一二等冠階に照らし、新らたに、新制官階に読み替へた如くと同様である。⁽²⁷⁾

これは、我国に於ける推古朝の一二等冠階制から大化の一三等官階への飛躍、つまり、單なる一等階の差ではなく、上位六等階から下位一等階、合わせて七等階の増加であつて、それが、三国的体制から中国的唐的体制への切換えを意味するのである。⁽²⁸⁾

それは、それが専ら唐文化の影響であると考えていたが、実は、それと全く同様の事を新羅も爲し、そこで、どち

らが先に始めたかという疑問に到達するのだが、新羅の場合、それは、少なくとも隋の末期に成立していたと観なければならぬ。

なぜなら、中国に於ける新羅一七等官階の知識は、『翰苑』に引くところの「隋東藩風俗記」なるものが根本となつたと考えられ、唐太宗の貞観年中に完成した魏徵等の『隋書』東夷伝にも引用されているからである。

そして、新羅が中国の小規模なモデルを創り上げたという背景には、やはり、対内的及び対外的という二面の必要があつたからである。

それは、対内的に新羅の国情が、ようやく安定期に入り、特に軍功を賞する必要性から、新制官階を上位に継足していく必要があつて、その事は、一七等官階成立以後も継続していくのである。⁽²⁹⁾

我国推古朝の一二等冠階を制定したのは、疑いもなく、高句麗、百濟の官階に対応する為であつた。

然るに、考徳天皇の大化三年、一三等官階、大化五年、一九等官階へと改訂を行ったのは、根本的に我国も、唐と対等な体制に立つという考えがあつたに違ひない。

その新羅が自らの官階制に於いて、モデル中国の骨品制を用いず、[〃]位[〃]と称するものを用いた事は、民族意識の昂揚を示すという目的と共に、唐に対する気兼ねという矛盾から生じたという事ができるであらう。

註

(1) 拙稿「栄典制度の比較憲法的考察」(国士舘大学大学院紀要第二一号所収 一九九一年・一八一頁及び安田元久編『日本の歴史』一九九一年・一一三頁等参照)。

(2) 岸俊男編『古代国家と日本(『日本の古代』第一五巻)』一九八八年・四八頁以下及び吉村武彦著『古代王権の展開』一九九一年・五〇頁以下等参照。

(3) Cummings Bruce, "The Origins of the Korean War", 1981, pp.3~16, James L. Stokesbury, "A Short History of The Korean War", 1988, pp. 19~27. によれば、一九五〇年六月二十五日、北朝鮮側より南朝鮮に対し、民族解放戦争が開始された。これより前、即ち、四八年八月十五日、既に大韓民国が、翌月九日に朝鮮民主主義共和国が、それぞれ成立するに至り、両国は、正面から対立した。前述の五〇年六月二十五日、北緯三八度線全域で、北朝鮮軍が南進して、釜山方面以外の大部分を占領したが、九月米軍上陸を機に、翌月平壤を突破するに至った。しかし、中国の警告と共に、十一月、中国の本格的介入によって、後退を余儀なくされた。五一年三月、ソウルを奪回、膠着状態となり、同年六月、旧ソビエト連邦代表マリクの休戦演説を機に、七月、交渉に入り、五三年七月二十七日、「休戦協定」が調印されたのである。

(4) 日本と朝鮮は、その史的比較考察を為すと、様々な時代的場面に双方が登場する。特に、古朝鮮に於いて、日本は、百濟を通じて南朝鮮系の新しい文化を取り入れたが、朝鮮半島との直接的関係は、加羅諸国（任那）の方が強い関係を有し、この時代、東洋に於ける中国、朝鮮、日本の三者は、その密接な関係で相互間の文物交流の下に影響を与え合い、牽制し合っていたのである。金錫亨著（朝鮮研究会訳）『古代朝日関係史』一九七〇年、八頁以下及び金達壽著『古代朝鮮と日本文化』一九八九年、九頁以下等参照。

(5) Byoung-Lo Philo Kim, "Two Koreas in Development", 1991, p. 193. 及び梶村秀樹著『朝鮮史』一九九一年・一九頁、朝鮮史研究会・旗田巍編『朝鮮史入門』一九六六年・七頁、井上秀雄著『古代朝鮮』一九七二年・四頁―一三頁等参照。

(6) Ch'one-Sik Lee, "Japan and Korea", 1985, pp. 1~5. 及び韓浩勛著（平本実訳）『韓国通史』一九七六年・一二頁、朝鮮大

学校歴史学研究室編『朝鮮史—古代から近代まで—』一九七六年・一九四頁―二〇一頁等参照。

(7) 高句麗・百濟・新羅の建国に就いては、現在、様々な説が存するが、私は、本稿に論じた様な神話説を採る。即ち、「高句麗」は、夫余族の一部族であった東夫余の金蛙王が、ある日、太白山の南の河ペリで、一人の女性に逢った。名を柳花といい、河伯の娘だと名乗ったが、親の言い付に背いた為、家を出されたと聞き、その女性を己の村へ連れ帰った。すると、その女性は、間もなくして、大きな卵を一つ生んだ。その子は、顔立から智慧までの全てに於いて優れており、特に、弓に就いては、一族で右に出る者が居なかった。そこで、東夫余の方言で、弓の名士という意味に於いて、「朱蒙」と称される様になった。しかし、王子や王の家来は、面白くないので、彼を抹殺しようと企てたが、それに気付いた母が、彼を逸早く逃し、付臣烏伊、摩離、陝父及び道中で出会った再志、武骨、黙居等と共に卒本川という所に都を置き、高句麗と国称を決め、王

位に即いたのであり、「百濟」は、高句麗始祖朱蒙の子の溫祚が、長子と争わざるを得ない状況に置かれ、次子沸流と共に国を出た。日頃から仕えていくれた一〇人の臣と南へ下り、漢山に着いた。沸流は、臣下の反対を押切つて海側へ、弟溫祚は、臣下の意見を入れ慰礼城に都を置き、一〇人の忠臣に因んで国称を十濟としたが、後に百濟と改め、王を名乗ったのである。更に、「新羅」は、今を去る二〇〇年前、辰韓の六つの部族を率いる長たちがいた。部落といつても今の慶尚北道より南へ延びた広さで、各々、揚山部、高墟部、大樹部、珍支部、加利部、高耶部に分けられ、これらを受持つ長たちは、後の世の李・鄭・孫・崔・裴・薛と名残る先祖であった。ある時、六人衆の馬の側に大きな卵が落ち、その中から一人の男子が現われたので、六人衆が抱きあげ、泉の水で産湯を漬らせたところ、その赤子の身体から神々しい光が輝いた。天が我々に賜わったに違いないと考え、御子を大切に育て、一三歳となった時、王位に即く事を崇められた。崇神(天王)四一年、漢の宣帝五鳳元年四月、氏を朴、名を赫居世とつた、とこう。詳しくは、R.F. Craig, "East Asia: II. The Modern Transformation: the Korea's History", 1965, pp. 261-263 及び金素雲著『三韓昔がたり』一九八八年・一六頁―三三頁等を参照されたい。

(8) 金錫亨・前掲書・三〇頁―三三頁、『三国史記』百濟本紀、毗有王二(四二八)年の条及び「古事記(岩波書店刊・倉野憲司校注『日本古典文学体系Ⅰ』一九五八年・二五頁等参照。

(9) 「BC二〇七年、中国では、秦滅亡と共に漢が成立するが、この戦いにより古朝鮮へ避難民や亡命者が俄に増えた。その中に、BC一九五年、一〇〇余の臣下を引きつれてきた衛満なる者がいた。彼は、元朝鮮族であったという説もあるが、準王は、彼に西方百里の地を封じて厚遇したにもかかわらず、BC一九四年、古朝鮮の準王を功撃して滅亡させ、以後、衛氏朝鮮と称するに至り、三代八〇年間、BC一〇八年迄存続するが、漢の武帝によって滅ぼされ、漢の支配下に置かれた」、いわゆる漢四郡の設置である。金達寿著「朝鮮」一九八九年・四四頁―四五頁参照。

(10) Chone-Sik Lee, ibid., p. 79 及び李基白著(宮原兎)・中川清共訳『韓国史新論』一九七一年・五三頁、金達寿・前掲書・四六頁―五三頁等参照。

(11) 南方ソウルの漢江以南に於いて、それまで部族連盟体、若しくは、村落連盟体を形成していた辰国が俄に三つに分かれ、馬韓・辰韓・弁韓の分極化の動向が始まり、いわゆる「三韓」が、各々小部族の集合体として成立した。このうち中心的存在は、馬韓であって、五四もの小部族国から成っていた。Yuangmok Koo and Sung-joo Han, "The Foreign Policy of the

Republic of Korea', 1985, p. 171. 及び金両基著『物語韓国史』一九九一年・四六頁、梶村・前掲書・三四頁～三七頁等参照。

- (12) 高句麗が最大勢力国家として、他の百濟、新羅の優位に立った理由は、①接境する中国と共存共栄が為されたある一時期、②逸早く軍事力を導入した為の錯誤的夜郎大な感覚や印象を与えた事、③領有地域大となり得る印象を与えた事等が挙げられ、当時、朝鮮のみでなく、中国及び我国も夜郎大なるものを有していた。これが年と共に、他の二国の軍事化や夜郎大なる民族意識が伴って、及び前述の理由の破綻によって、最大勢力国家が同勢力国家となった。つまり、高句麗は、初めから最大勢力、いわゆる領有地域が大なるだけで、勢力的には、他の二国よりも劣ったかも知れない。しかし、高句麗の不運は、中国分裂期を除く、全ての時期、絶えず中国の脅威に曝されていた事であり、結局は、对中国防備の面で国力を使い果してしまつたと考える。高句麗の対中武伝に就いては、Gye-Dong Kim, "Foreign Intervention in Korea", 1992, pp. 1～8. 及び梶村・前掲書・三六頁、金両基・前掲書・一二頁以下等を参照された。

- (13) 任正燾編『朝鮮の科学と技術』一九九三年・二八二頁以下及び金両基・前掲書・二二〇頁～二二三頁等によれば、八九一年、後に高麗の母体となる農民の蜂起が新羅の北部で発生し、その指導者の中に新羅の王子弓裔がいた。新羅第四七代憲安全の子として生まれたが、生まれながら齒がはえ、眼は、異常な光を放っていた為、国家災禍の前兆という事で、乳母を付けて王宮外の世達寺に預けられた。彼は、生来、学問を好まず、村の子供達と遊び戯れ、性格も素直さに欠けた。僧号を善宗といい、各地で発生している反乱に参加する。それは、父への慕情と憎悪がそうさせたのであらうと推察できる。その後、戦いに勝利した彼は、国称を「高句麗」と定めた。九〇一年の事である。八九二年、完州（現在の全州）で甄萱を頭とする大きな農民蜂起が発生した。彼は、農民兵と共に武珍州（現在の光州）を襲つて占領、国称を後百濟と定め、その始祖となり、弓裔（善宗）を王とする東の後高句麗とその勢力を争っていたが、この時期、まだ新羅は、王朝として存続していた。実際、それを鎮圧する力も能力を失っていたのである。九一一年、弓裔は、国称を泰封と改めたが、彼の歪んだ性癖は、一向に直らず、反つて日増に悪化し、疑い深くなり、罪のない臣下を斬罪に処し、人望を失つていった。結局、弓裔は、臣下王建の叛旗によって、城から逃亡したが、間もなく、農民兵に発見され、斬殺されてしまうのである。

- (14) 西尾昭著『韓国―その法と文化』一九九三年・一七頁～二〇頁参照。尚、古朝鮮からの中国、朝鮮及び日本の時代背景を確認する為、別表2の略年表を作成した。同時に参照されたい。

- (15) 金両基・前掲書・一一一頁及び金素雲・前掲書・二二頁～二五頁等参照。

(16) 中国の基本的思想は、民族の中華意識と儒教の二つの柱により、支えられている。自民族は、世界の中心にある唯一つの花の様に咲きはこる文化国、つまり、中華であり、周囲の異民族は、野蛮な夷狄である。そして、中国の皇帝こそが、宇宙の主宰者である天から命を受ける資格、若しくは、受けられる者であつて、天の意思に則つて地上を支配するものであるから、皇帝は、人事のみならず、自然現象の正常な運行に対しても責任を有しているのであつて、もし、政治を誤り不徳の致すところあらば、天は、災害を下して、これに警戒を与える。この様な徹底的な基本思想により、支えられていた中国のそれらは、周辺民族の長、若しくは、国の王は、中国の臣下と考え、特に朝鮮は、中国の飛地という領有意識に絶えず支配されていた為、本稿に論じた通り、中国骨品制の正四品が高句麗や百濟等の一品に相当する制度を生じさせてしまうのである。因みに、中国骨(官)品制下の正四品とは、大夫(臣下)の位である。貝塚茂樹著『中国の歴史』上巻・一九九〇年・七頁及び一五九頁―一六〇頁参照。

(17) 朝鮮三国に於ける官階制は、全て中国骨品制に基づく官品制を模倣しており、中国の基本的方針によつて、朝鮮三国の統帥たる高麗王は、臣下たる名目的な王で、実質的には、遼東郡開国公という爵を有する諸侯と同格であるが、同等ではない。なぜなら、中国は、朝鮮を国家として、あくまで否定している事は、歴史的時代的背景で明らかな様に、朝鮮は、中国の領有権が及ぶ飛地なのであるから、国家という立場で対等でないものが、官品制で対等同等に成り得るのは、土台無理である。

(18) Easton David, Englewood Cliffs, "A Framework for Political Analysis", 1965, pp. 2-13. 及び貝塚・前掲書・一三七頁―一四〇頁等参照。

(19) 『翰苑』に就いて、唐の張楚金の『翰苑』は、佚書であるが、その最後の第三〇卷蕃夷の部分が我国に伝つて、「京都大学文学部影印唐鈔本」第一集として複製され、更に、「遼海叢書」第八集に鉛印して、収められた。

(20) 高句麗の官階制を本稿で考察しているが、別表1でわかる様に、従七品の次に正九品が位している。これは、誤りではなく、『隋書』に掲げられている「二等官階と『翰苑』の蕃夷部の記事とを比較的考察し、それにより、相互校訂すると表の通りになる。即ち、従七品の次には、確かに、正八品及び従八品が存するし、『翰苑』の記事にもあるが、『隋書』にはないのであつて、前者も序列的に考えると別扱いにしており、別称を挙げていない為、この二等官階は、臨時の官であると考えられるので、正式官階から除外した。

(21) 遼東郡開国公という爵は、官品制下では、正一品と従一品の間に、その位を置いている事は、本稿で論じているが、この

位は、同格を意味するもので、同等を意味するものではない、決してないのである。しかし、その長史・司馬は、あくまで、中国地方長官の属僚であるという厳格な位置付けによって、大夫の位たる正四品官として、礼遇されていたのであり、これらの者だけは、同格同等であったと考える。

(22) 岸・前掲書・五四頁―六四頁及び金素雲・前掲書・三〇頁―三二頁等参照。

(23) 本稿より論じているが、百濟は、高句麗始祖朱蒙の子温祚によって、建てられた国で、高句麗から観ると分国というより、舍弟国に近い。その為、国家形態から、制度、文化、農業の全般に於いて、高句麗を範としている。別表1でわかる様に、官階制に於いても同様の事がいえ、高句麗のそれに対応すべく、制度化されたと考える。しかし、私の考察によれば、百濟は、高句麗の正一品官吐拏に対応していた達率の上に、佐平を設け、正一品官に改訂した事や、その上に、大佐平を新たに制度化する等、少しでも、高句麗を擢んでようと為す、若干の努力が確認されている。吉村武彦著『古代王権の展開（日本の歴史三）一九九一年・二二八頁―二三〇頁参照。

(24) 山本武夫著『詳解日本史』一九九〇年・五〇頁及び吉村・前掲書・五一等参照。

(25) 新羅は、当初、高句麗こそが、我民族の最終点であると考えたに違いない。しかし、実際は、中国という天命を受けて存在する大帝國を目の前にして、今迄の新羅の為してきた無意味さを幾何考えたであろうか。元来、朝鮮の高句麗や百濟は、中国骨品制を丸写した制度で、新羅に至っては、民族意識を支える夜郎大なる精神により、中国骨品制を用いず、位と称するものを採用し、一七等官階制を導入したが、その官階の五位以上は、全て王族でなければ叙されないという厳格な身分制によって、その秩序を維持していた。だが、本稿でも論じている様に、外交面に於いて、自國への不利益を生じ始めた為、官階制の改訂を考えたが、王族の叙位をなくすと、血縁関係で維持されている王朝自体をも崩壊し兼ねないので、あくまでも暫定的に王族官階（一位から五位）を一等官階と看做す事によって、六位を名目的に二位へ格上げでき、対外的な格の問題を解消した。岸・前掲書・五二頁―五五頁及びC. Osgood, "The Koreans and their Culture", 1954, pp. 103-111. 等参照。

(26) 六七五年二月、唐将劉仁軌と新羅将文訓の相对関係及び背景に就いては、金岡基・前掲書・二〇三頁―二〇四頁及び梶村・前掲書・四〇頁―四七頁等を参照されたい。

(27) 百濟遺民が我國へ帰化した事に於ける文献は、様々存するが、私は、吉村・前掲書二四〇頁及び池内宏著「百濟滅亡後の動乱及び唐・羅・日三国の關係（『滿鮮史研究』上世第二冊所収）一九六〇年・二二二頁等を基本的に参照した。

(28) 滝川政次郎著『律令格式の研究(法制史論叢二)』一九六七年や利光三津夫著『律令及び令制の研究』一九六〇年及び野村忠夫著『律令官人制の研究』一九六七年等によると、大化三(六四七)年の改編は、結果的には、一三等官階となつて推古のそれより、一等官階増と見受けられる。しかし、実質は、推古の大小の官階を伴わせて、一等官階に編入された為、徳から智に至る一二等官階は、半分の六等官階になる。

(29) 統一新羅は、新羅王家の金春秋(太宗武烈王)と伽耶王家の金庾信の血縁関係により樹立された事は、周知の通りであるが、この金庾信が対高句麗戦の功で、旧太대角干の称号を賜った。金岡基・前掲書・二〇一頁及び直木孝次郎著『古代日本と朝鮮・中国』一九八八年・一一八頁以下等参照。

別表2は、西尾・前掲書・二六四頁―二六六頁を作成した。

百 濟				高 句 麗			中 国
							正一品 從一品 正二品 從二品 正三品 從三品
				官 称	別 称	階	
佐平 (一 品)	服	紫	冠飾	吐 粹	大 対 盧	一品	正四品
達率 (二 品)			銀花	太 大 兄	莫 何 羅 支	二品	從四品
恩率 (三 品)			鬱 折	(華 言)	主 簿	從二品	正五品
德率 (四 品)			大夫使者	謁	奢	正三品	從五品
扞率 (五 品)			紫帶	皐衣頭大兄	中裏皐衣頭大兄・皐衣先人	從三品	正六品
奈率 (六 品)				大 使 者	大 奢	正四品	從六品
将德 (七 品)	服	緋	紫帶	大 兄 加	纁 支	正五品	正七品
施德 (八 品)			皐帶	拔位使者	儒 奢	從五品	從七品
固德 (九 品)			赤帶	上位使者	契 達 奢 使 者 ・ 乙 奢	正六品	正八品
季德 (十 品)			青帶	小 兄	失 支	正七品	從八品
対德 (十一品)	服	青	黄帶	諸 兄	翳 属 ・ 伊 紹 ・ 河 紹 還	從七品	正九品
文督 (十二品)				先 生	失 元 ・ 庶 人	正九品	從九品
武督 (十三品) 佐軍 (十四品) 振武 (十五品) 克虔 (十六品)			白帶				未入流

日本					新羅		
推古十一年 (603)		大化三年 (647)		大宝元年 (701)			
		大織 小織 大繡 小繡 大紫 小紫	服深紫	正一位 從一位 正二位 從二位 正三位 從三位	伊伐瀆 (一位) 伊尺瀆 (二位) 通 瀆 (三位) 波珍瀆 (四位) 大阿瀆 (五位)	紫衣	錦冠 緋冠
大德 小德	紫冠紫衣	大錦	服 緋	正四位 從四位	阿 瀆 (六位) 一吉瀆 (七位)	緋衣	
大仁 小仁	青冠青衣	小錦		正五位 從五位	沙 瀆 (八位) 綴伐瀆 (九位)		
大礼 小礼	緋冠緋衣	大青	服 紺	正六位 從六位	大奈麻 (十位) 奈麻 (十一位)	青衣	
大新 小新	黑冠黑衣	小青		正七位 從七位	大舍 (十二位) 舍知 (十三位)	黃衣	
大義 小義	白冠白衣	大黑	服 綠	正八位 從八位	吉士 (十四位) 大鳥 (十五位)		
大智 小智	黃冠黃衣	小黑		大初位 小初位	小鳥 (十六位) 造位 (十七位)		
		建武					

朝鮮		朝鮮年表		中国	日本		
高句麗	百濟	前前前	2333頃 104頃 108頃	檀君伝説による朝鮮開国 衛満 衛氏朝鮮建国 漢から攻撃を受ける 四郡設置	漢		
		313	高句麗	楽浪郡を滅ぼす	魏蜀呉		
		391	高句麗	広開土王即位	晋		
		475	高句麗	百濟を攻撃	南北朝		
		612	高句麗	隋軍撃退			
	660	新羅・唐連合軍	が百濟を滅亡				
	663	新羅・唐連合軍	於白村江 日本軍撃破	隋			
	668	新羅・唐連合軍	が高句麗を滅亡	唐			
	698	渤海成立		奈良			
	751	新羅 仏國寺建立					
新羅	渤海	918	王建 高麗建国		平安・鎌倉		
		926	渤海滅亡				
		936	高麗が後百濟を滅亡させ全国統一				
		1018	高麗が五道両界を設置	宋			
		1231	蒙古の侵略	元			
	高麗	朝	1270	高麗が蒙古へ服属		室町	
			1350	倭寇激化			
			1392	李成桂 朝鮮王朝成立	明		
			1413	全国を八道改変			
			1446	ハンケル(訓民正音)公布			
1498		世宗実録編纂に於いて士林派に対する弾圧					
1575		東人・西人の両班間の対立激化		安土桃山			
1592		壬辰倭乱(文録の役)					
1597		丁酉倭乱(慶長の役)					
1627		丁卯胡乱					
鮮	朝	1636	丙子胡乱	清	江戸		
		1721	王位継承を巡り、老論派と少論派が対立		明		
		1801	天主教徒弾圧				
		1860	崔済愚が東学創始				
		1866	シャーマン号事件				
	大韓帝国	大韓	1873	大院君失脚		明治	
			1876	閔氏政権奪取			
			1876	日朝修交条規締結			
			1894	日清戦争勃発			
			1897	大韓帝国成立 国王を皇帝とする			
大韓帝国		大韓	1904	日露戦争勃発	中華民國	昭和	
			1905	第1次日韓協約			
			1907	第2次日韓協約			
			1910	第3次日韓協約			
			1910	韓国併合条約締結			
	大韓帝国	大韓	1919	3・1独立運動		大正	
			1929	光州学生運動		昭和	
			1945	大東亜戦争終戦			
			1948	済州島4・3蜂起 大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国成立			